

# ベネット夫妻の言い分

——ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』に見られる結婚の理想と現実

坂 田 薫 子

## 序

確かに『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813)の関心は結婚適齢期を迎えたベネット家(The Bennets)の五人の娘たち、その中でも特に次女のエリザベス(Elizabeth)が、自分に相応しい伴侶と巡り合い、めでたく結婚することができるかどうかというところに存在している。しかしジェイン・オースティン(Jane Austen)の関心は、この作品のヒロインとヒーローであるエリザベス・ベネットとフィッツウィリアム・ダーシー(Fitzwilliam Darcy)がそれぞれの「高慢」と「偏見」という欠点を克服し、人間的に成長していき、最終的には理想のカップルとなっていく姿を描くことにのみあったわけではなさそうである。なぜならば、エリザベスが紆余曲折を経てダーシーを最良のパートナーと認められるようになった理由は、自らの欠点を克服し、人間的に成長できたことだけにあるのではないからだ。彼女は周囲のカップルの姿から結婚の意味について深く考えさせられ、多くを学び、ダーシーこそが自分を幸せにしてくれる伴侶となってくれるであろうという結論に至ったからこそ、彼の求婚を受け入れたのである。オースティンはこの作品で、物語の中にさり気なく組み込まれている脇役たちの結婚生活の描写に、当時の、そして現代にも通じる結婚の理想と現実を明らかにした上で、主人公エリザベスとダーシーの結婚に一つの理想の結婚像を描いてみせたと考えられる。

周囲の様々なカップルの結び付きを観察し、エリザベスが夫選びの必須の条件と見なすに至ったものは、情熱(自分を愛してくれる男性に覚える「感謝の念」("gratitude")が女性の抱く愛の形であると主張されていた時代の作品であるため<sup>1)</sup>、この場合、相手の男性が自分に性愛を感じていることを示す)、経済力(ベネット氏がエリザベスに残せる遺産、つまり彼女の持参金は千ポンド程度であるため(104, 286)、彼女の場合は相手の男性に家族を養っていくための十分な財力があることを意味する)、敬意を払い合える対等な関係、の三つを併せ持つことであつたと考えられる。エリザベスが自らの結婚について考えるとき、常に彼女の意識に上ってくるキーワードは「幸福」("happiness")であるが、その彼女に周囲のカップルたちは、上記の三つの要素のうちのどれか一つでも欠けてしまうと、幸福な結婚生活は望めないことを身を持って示してくれているからだ。この作品が始まってから最初に結婚する友人シャーロット・ルーカス(Charlotte Lucas)とコリンズ(Collins)氏との結婚が、情熱の欠如している関係において、経済力のみを必須条件

に掲げて夫選を強行することの浅はかさをエリザベスに教える。そしてこの作品の後半のクライマックスで突然起こる末妹リディア (Lydia) の駆け落ちが、経済力の欠如している関係において、情熱のみを推進力に突っ走ることの浅はかさをエリザベスに教える。では情熱と経済力の双方が備わっていれば結婚生活は安泰なのだろうか。その問いへの答えをこの作品が始まる二十三年前 (7) から結婚生活に入っていた両親ベネット夫妻がエリザベスに示してくれる。ベネット氏はロングボーン (Longbourn) という地所を持ったジェントリー階級の出身であるから、経済力という要素は満たしている。そして二人の結婚は第二巻第十九章の説明によって、ベネット氏がベネット夫人に覚えた情熱の勢いで成立したことがうかがえる。しかしそれにもかかわらず二人の結婚生活は理想像とは言い難い。ベネット夫妻はエリザベスに、夫選のもう一つの必須要素、敬意を払い合える対等な関係の大切さを教えてくれるのである。こうしてエリザベスは、そうした三つの要素を兼ね備えた男性の出現を待ち望むことになるのだ。そこでまず次章では、理想の夫婦像の反面教師として間接的にエリザベスに幸福をもたらしたベネット夫妻の結婚生活について探りを入れてみることにする。

## 1. ベネット夫妻の結婚生活——ベネット氏の言い分

### 1.1 夫失格

物語の焦点は次世代のエリザベスの夫選に当てられているため、彼女の両親であるベネット夫妻の出会い、求婚、今日に至るまでの結婚生活に関してあまり多くは語られていない。しかし父親、母親としての今日の二人の描写の行間から、以下のような過去が推測可能となっている。まずは二人の関係をベネット氏の側から描くと次のようになる。

ベネット氏は二十三年前、まだ血気盛んな青年時代、ベネット夫人の「若さと美貌」(“youth and beauty”, 228) に魅了され、彼女の女性としてのセクシュアリティに強い性愛を抱き、その情熱の激しさゆえに一瞬理性を失って求婚する。彼はベネット夫人の外見のみに惹かれ、彼女の物の考え方や性格などといったものを十分に吟味も理解もせず、勢いで結婚してしまった。しかしこうした激しい感情は一過性のものが多く、結婚後どの程度の期間が経ってからののかは定かではないものの、自分の置かれた立場を冷静に観察できるようになった頃、ベネット氏は初めてベネット夫人の「無教養」(“illiberal mind”, 228) (ただしこれは高等教育を受けることのできなかった当時の女性には致し方ない欠点である) と「理解力の低さ」(“weak understanding”, 228) に気付き、何一つまともな (おそらくベネット氏の望んでいたウィットに富んだ) 会話が成り立たないことに苛立ちを感じるようになる。ベネット夫人を軽蔑し、また自分の浅はかな配偶者選に自虐的になっているからか、ベネット氏は彼女をからかっては怒らせることに次第に加害者の喜びを見出すようになり、今日では妻の「無知」(“ignorance”, 228) と「愚行」(“folly”, 228) にまるで他人事のように興じ、日々自らの不幸を慰めて過ごしている。

この物語の冒頭は次の有名な下りで始まる。

It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.

However little known the feelings or views of such a man may be on his first entering a neighbourhood, this truth is so well fixed in the minds of the surrounding families, that he is considered as the rightful property of some one or other of their daughters. (5)

これは夫選びには相手の男性の財産が総てで、彼が何を「感じ」、何を「考えて」いるかは関係ないという女性の（正確には娘を嫁がせようと躍起になっている母親、そしてここではベネット夫人の）視点での意見であるが、性愛ゆえに我を忘れ、相手の女性が何を感じ、何を考えているかを理解することなく妻選びを執行してしまう男性の愚かさがベネット氏に体现されていることを考えると、益々辛辣さを強める導入部分として読むことが可能になる。

ちなみにベネット氏の女性版が末娘のリディアである。そして実のところエリザベスにさえベネット氏の二の舞を踏む可能性が示唆されている。彼女が当初ジョージ・ウィッカム (George Wickham) の魅力にリディア同様強烈に魅了され、正しい判断力を失ってしまったことは明白な事実である。エリザベスがウィッカムの魅力に多くの女性たちが虜になったことを語るとき、実は彼女自身が彼の性的魅力に抗し切れなかったことをほめかしている：“Wickham has every charm of person and address that can captivate a woman” (270); “Every girl in, or near Meryton, was out of her senses about him for the first two months” (271)。ウィッカムの登場は、エリザベスが父親似で、異性の美しい外見にめっぽう弱いことを露わにしているのだ。あるいはエリザベスは、末妹リディアと、ひいては父親ベネット氏と瓜二つで、セクシュアリティに満ちた異性に弱いと言った方が適当かもしれない<sup>2)</sup>。

ウィッカムは初対面のエリザベスに散々ダーシーの悪口を言っておきながら、次の機会には、先代のダーシー氏への敬意から、ダーシーの悪口を公言したくないなどと発言したり (78)、ダーシー家の人間の悪口を言うのは心が痛むなどと口にしたたりする (80)。こうしたウィッカムの言動不一致にまったく気付く様子のない点は、普段のエリザベスの洞察力からすると実に不自然である。これは既にウィッカムの外見に一目惚れをし、頭に血が上ってしまっているために、エリザベスが正しい判断力を行使できなくなっていることの表れなのだ。彼女はウィッカムに恋し、ダーシーを嫌うあまり、物の見えない人間になっており、正しい判断力を欠いた偏見の塊と化していく。第一巻第十八章 (94) で、エリザベスはダーシーとウィッカムの関係について、ダーシーの話しか聞いていないからとチャールズ・ビングリー (Charles Bingley) の意見を認めようとしなが、彼女の方こそウィッカムの話しか聞いていないのだから、もしビングリーに偏見があるというのなら、彼女にも偏見があるはずではないか。また、ビングリーは話の全貌を知らないで正しい判断を下せるはずがないとエリザベスは主張するが、彼女自身も話の全貌を知らない以上、ビングリーと同じ立場にいるはずである。彼女は自分は人を見る目があると自負しているが、その実先入観や偏見に囚われた、物の見えていない人物であることが露呈している。彼女のこうした先入観や偏見がウィッカムへの性愛に根ざしていることは、彼女の大きな欠点であり、彼女が父親や末妹と同じ間違いを繰り返したとしても不思議ではないことを暗示しているのである。

ここで話をベネット氏に戻そう。ベネット氏の側に立てば、結婚生活の不幸の原因はベネット夫人の無教養と理解力の乏しさにあるのだから、彼女を嘲笑的にする自分を正当化できると主

張したくなるかもしれない。しかしベネット夫人は自分の本性を隠してベネット氏をたぶらかし、彼を騙して結婚したとは考えにくい。彼女はベネット氏と出会ったときも、結婚して二十三年経った今日と同じように無教養で理解力の乏しい女性であったはずで、おそらく今日とまったく同じ振る舞いであったと思われる。ただし若さゆえにその美貌が際立ち、その色香が若かったベネット氏の目から、その性質上の欠点を覆い隠してくれていたに過ぎないと考えられる。となると、ベネット氏が二人の結婚生活を不幸と考えるとき、その不幸をもたらした原因はベネット氏の「浅はかさ」(“imprudence”, 228)の方にあるのであって、ベネット夫人をからかい、彼女まで不幸にする権利は彼にはないと言わざるを得まい。

## 1.2 父親失格

父親を尊敬し、慕っている娘のエリザベスから見ても、ベネット氏の「不釣合いな」(“unsuitable”, 229)結婚の責任は父親の側にある。結婚して直ぐにベネット夫人に愛想を尽かすやいなや、ベネット氏は妻の無知や愚行を正そうとするのではなく、彼女が世間の笑いものになっていることに無責任にも興じている。夫には妻を守り、導くことが求められていた時代にこうした態度を取るベネット氏は、明らかに夫としての務めを放棄している。

Elizabeth, however, had never been blind to the impropriety of her father's behaviour as a husband. She had always seen it with pain; but respecting his abilities, and grateful for his affectionate treatment of herself, she endeavoured to forget what she could not overlook, and to banish from her thoughts that continual breach of conjugal obligation and decorum which, in exposing his wife to the contempt of her own children, was so highly reprehensible. But she had never felt so strongly as now, the disadvantages which must attend the children of so unsuitable a marriage, nor ever been so fully aware of the evils arising from so ill-judged a direction of talents; talents which rightly used, might at least have preserved the respectability of his daughters, even if incapable of enlarging the mind of his wife. (228-29)

そしてベネット氏は自分のこうした態度のせいで、娘たちまで母親のことを恥ずかしいと感じ、軽蔑する結果を生じてしまっている弊害に完全に無頓着である。また、妻の無知や愚行を世間の晒しものにすることによって、ベネット夫人だけでなく、ベネット家全員が世間から馬鹿にされ、それによって娘たちが害を被っていることも意に介さない。ベネット氏は夫としての務めだけでなく、父親としての務めも果たそうとする意思がないのである。

ベネット夫妻に男の子が生まれなかったことは、地所ロングボーンの相続権がコリンズ氏に移ってしまうという点においても、自分の精力を注ぎ込める教育の対象が持てなかったため、その有り余った精力が苛立ちとなって妻いじめに転換されてしまったという点においても、確かに残念なことではあるが、それは息子が生まれることを見込んで、娘五人の将来のために財政的な蓄えをしておかなかった無計画性(292)を正当化してはくれないばかりか、彼が娘たちの教育を放棄してしまったことを正当化してもくれない。五人の娘たちは下へ行けば行くほどしつけが

なっていないことが示唆するように、ベネット氏はおそらく当初は（多分次女エリザベスあたりまでは）子供の教育に参加していたのかもしれないが、途中から子育てへの参加を完全に放棄し、総てをベネット夫人に任せきりであったと思われる。ベネット夫人では娘たちをしつけることはできず、彼女たちをひたすら甘やかす結果になり、そのために末娘のリディアは特にその道德面において完全に野放し状態<sup>3)</sup>の娘になってしまったのであろう。第二巻第六章にキャサリン・ド・バーグ令夫人（Lady Catherine de Bourgh）が、娘たちにガバナスをつけなかったというベネット家の子育て方法に驚愕する場面（161）が登場するが、無教養で理解力の乏しい妻一人に子供の教育を丸投げするという行為は実に無責任であり、ベネット氏は夫としてだけでなく、父親としても完全に失格者である。リディアの駆け落ちでてんでこ舞いさせられるのは、言わばベネット氏への当然の罰である<sup>4)</sup>。

ベネット氏の家父長としての責任放棄は、面倒なことや不都合なことが起こると決まって書斎に逃げ込み、問題回避を図ろうとする彼の態度に端的に象徴されているが、リディアの駆け落ちは、ベネット氏が父親として失格であることだけでなく、父親として無能であることををも暴いてみせる。ベネット氏はロンドンに十日間滞在してリディアを搜索するものの、何一つ手がかりを得られないままロングボーンに戻って来る。ロンドンで大掛かりな搜索をする財力もコネもないため仕方ないこととはいえ、娘を連れ戻すことなく一人でのこのこと帰ってくることをベネット夫人に非難されてしまう（283）のも頷ける。ロンドン滞在中は、いくら何も進展がなかったとはいえ、一度だけ滞在所の住所を伝える手紙をジェイン（Jane）に送っただけで、ロングボーンでリディアの行く末を心配する家族に何一つ連絡をしてこない。また、戻って来ても不機嫌で、自己憐憫に陥っており、家族も同じように辛い思いをしているというのに、優しい言葉一つかけられない。さらには、恐る恐る質問をするエリザベスに憤り、自室に閉じこもって出て来ないベネット夫人を皮肉り、最後には今後舞踏会には一切行かせないとキティ（Kitty）に当たり散らす（283-84）。周囲の人間、それも娘たちに当たるベネット氏は実に幼く、父親として何の権威も持っていないことが明らかになっている。

また、リディアが見つかった後も、いくら義弟のガーディナー（Gardiner）氏が来なくていいと言ってくれたからといって、できるだけリディアの件に関わりたくないと、再びロンドンに向かうことを怠り、血の繋がらないガーディナー氏に総てを任せ切りにして、自分は娘リディアの結婚式に出席しようともしないのは、父親としてあまりにも無責任な態度である。これではベネット氏が家族だけではなく、周囲の人々にも信頼されなくなったとしても致し方あるまい。事実ダーシーは、リディアとウィッカムの件について、リディアの父親であるベネット氏と相談するのは得策ではないと考え、敢えてベネット氏が去るのを待ち、代わりにガーディナー氏を相談相手に選んでいる。ペンバリー（Pemberley）訪問で、領主、主人、家父長としてのダーシーの優れた実力を目の当たりにしてきたばかりのエリザベスには、父親の不甲斐なさが際立って見えたことだろう。家庭の危機に際して、無能を曝け出す父親ベネット氏に、エリザベスは、一家の主、家父長として、妻を、そして子供たちを守ることのできる、力強く信頼の置ける男性を夫に選ぶことの大切さを身にしみて感じた違いはない。

### 1.3 エリザベスの学んだこと

こうした父親ベネット氏の結婚の失敗は娘エリザベスに、性愛のみで生涯の伴侶を選ぶことの間違いを教える。同じことを末妹リディアの結婚の失敗も姉エリザベスに教えるが、リディアの結婚が自分の性愛のみで、相手に愛されていない状態での結婚の不幸と、経済力のない相手との結婚の不幸の二つを示しているとする、ベネット氏の結婚は、自分の性愛のみで、性格が一致していない（お互いが分かり合えない、価値観が異なる）相手との結婚がもたらす不幸を示している。またベネット氏の父親、家父長としての不適正さは、娘エリザベスに、妻となる自分にとって良い夫としてだけではなく、生まれてくる子供たちの良い父親になることができる男性を生涯の伴侶に選ぶことの大切さを教えることになるのである。

## 2. ベネット夫妻の結婚生活——ベネット夫人の言い分

### 2.1 妻として

ベネット夫人にとって、結婚とは女性に安定した将来を約束してくれるものであり、その点シャーロットとの共通点が多い。シャーロットは不器量なため、その知性でコリンズ氏の自尊心をうまい具合にくすぐり、妻の座という永久就職口を確保したが、ベネット夫人は、死去に伴って収入が終わる擬似ジェントリー階級<sup>5)</sup>の弁護士<sup>5)</sup>の娘(29)であった彼女から見ると自分より階級が上のジェントリー階級(土地を相続していくため、死去によって収入が終わるわけではない階級)のベネット氏をその美貌と色香で虜にして、結婚を果たした。彼女にとってベネット氏は当初から性愛の対象と言うよりもむしろ、自分(と生まれてくる子供たち)が生きていくための経済力を体現する存在だったのであろうことは、結婚に至るまでと新婚生活を送っている頃はおそらくその性愛ゆえに慇懃に振舞い、彼女をチャホヤしてくれていたと思われるベネット氏に、今ではからかいの対象にされ、常に自分の理解力を馬鹿にされていることへの憤りよりも、彼の死後、ロングボーンが、つまりは財産がコリンズ氏に奪われてしまうことへの憤りや、夫が娘たちの結婚、つまり、娘たちが生きていくための経済力を保証してくれる制度のために何一つ努力をしてくれないことへの憤りの方が遥かに強いことから想像できる。

もちろん第一巻第二十二章で、当初から理解し合える望みなど何一つ持たず、その知性や性格に軽蔑の念さえ隠せないにもかかわらず、生活の安定のみを求め、言わば諦めの境地でコリンズ氏との結婚を決意したシャーロット(120-23)とは大いに異なり、ベネット夫人は自分よりも階級が上で、知性に溢れ、さらには自分に夢中になって求婚してくれたベネット氏に敬意や感謝の念<sup>6)</sup>を抱き、当初はロマンス小説のヒロインになったような高揚を覚えていた可能性も否定できないが、自分が年を取って色香を失っていくに連れ、夫が自分への興味を失い、それに伴って自分への思いやりをも失っていくことに恨みを抱いているようには思われない。どうやら、不器量で大した持参金もなく、さらには年上(シャーロットは二十七歳(19, 120)で、コリンズ氏は二十五歳(63))という悪条件を備えていたシャーロットが、最初から諦めの境地で結婚生活を始めたのと似て、ベネット夫人も、知性の面でも階級の面でも自分とベネット氏は対等な関係など築けないことを十分に理解した上で、ベネット氏との結婚生活に臨んだように思われる。

## 2.2 母親として

当時の女性には致し方ないことであって、必ずしも本人の欠点ではないのだが、高い教育を受けているわけではなく、また、子供の教育にどの程度お金をかけるかの決定権は財産の所有者である夫にある以上、彼女一人が背負わされた娘たちの教育に失敗したとしても、ベネット夫人に全面的な非があるとは思えない。そして、第一巻第七章において、天候の思わしくない中、長女ジェインを馬で送り出し、敢えて訪問先のピングリー家で体調を崩させることを目論んだり (31-32)、第二巻第十八章において、適切な保護者もつけずに誘惑の多い都会へ無分別な末娘リディアを送り出すことの危険性に目をつぶったり (221-22) と、ベネット夫人も、娘たちの将来にあまりに無頓着で父親として適格であるとは言い難いベネット氏と同程度に、母親として不適格であることは否定できないものの、滑稽なまでに娘五人の結婚相手探しに躍起になっている彼女は、実は夫ベネット氏と異なり、彼女なりのやり方で娘思いであると言える。ガバネスとレディーズ・コンパニオン以外はジェントリー階級以上の女性が就いて恥ずかしくない職業はなく<sup>7)</sup>、女性の生きる道は結婚しかなかったと言って過言ではなかった時代、ベネット氏と自分が死んだ後、生活の面倒を見てくれる夫を見つけない限り、娘五人が路頭に迷うことは避けられない現実である以上、自分が生きている間に何とかして娘たちの将来を確実なものにしてやりたいと願うベネット夫人は、やり方に多少問題があったとしても、母親の鏡と言えないこともない。その効果はいただけないとしても、その意図においては、ベネット夫人は、親として無責任という言葉が体現したようなベネット氏の、言わば究極に位置していると言ってもいいかもしれない。あまりに難は多いが、ベネット氏に比べれば、ベネット夫人の方が親としては上位にいると言うことができるのではないだろうか。事実ジェインは、ベネット夫人の無教養な言動は恥ずかしいと感じているものの、母親の愛情に感謝している。ジェインはピングリーからプロポーズをされると、まずは母親に報告すべきと考え、次のように言う：“I would not on any account trifle with her affectionate solicitude” (328)。このジェインの発言は、その品格のなさゆえ、お節介が空回りばかりする母親ベネット夫人が、娘たちの将来のことを母親として心の底から案じていること、彼女なりのやり方で娘たちを愛していることが娘たち（の少なくとも一人）に（は）伝わっていることを示している。

## 2.3 エリザベスの学んだこと

母親ベネット夫人の結婚の失敗は娘エリザベスに、価値観が似ていて、お互いに敬意を払い合えるパートナーを選ばないと結婚生活は不幸になることを教える。親友のシャーロットにコリンズ氏との婚約を告白された際、エリザベスがシャーロットとコリンズ氏は「不釣り合い」(“unsuitable”, 123) なカップルであり、二人が結婚しても幸せにはなり得ないと考える理由として挙げているのは、どう考えてもシャーロットがコリンズ氏に「尊敬と敬意」(“regard and esteem”, 133) を感じることはできないはずがないというものであった。エリザベスは夫選びにおいて、夫となる男性に女性は「尊敬と敬意」を感じることができなければならないと考えていたことがうかがえる。このように、友人シャーロットの結婚が、自分より知性が下で、敬意を払えないような男性を夫にすることの不幸を教えているのだとしたら、母親ベネット夫人の結婚は、自分より知性が上で、敬意を払える男性を選ぶのはいいが、その男性の方も自分に敬意を払ってくれて、自分の

考え方も尊重してくれない限り、つまり、思いやりが一方通行ではなく、双方向を向いていない限り、結婚生活は不幸となることを教えてくれているのだ。

事実、ベネット夫妻の結婚生活の不幸の原因はテキスト内で次のようにまとめられている。

Had Elizabeth's opinion been all drawn from her own family, she could not have formed a very pleasing picture of conjugal felicity or domestic comfort. Her father captivated by youth and beauty, and that appearance of good humour, which youth and beauty generally give, had married a woman whose weak understanding and illiberal mind, had very early in their marriage put an end to all real affection for her. Respect, esteem, and confidence, had vanished for ever; and all his views of domestic happiness were overthrown. (228)

ベネット氏が妻に対する「尊敬、敬意、信頼」を失ったとき、ベネット夫妻の「家庭の幸福」の望みも絶たれたことが明らかにされている。さらに皮肉なことに、この作品の最後には、ダーシーとの結婚の意図を伝えるエリザベスに向かって、ベネット氏自身が、生涯の伴侶となる相手を「尊敬」(“looked up to”, 356) できないと、その相手に「敬意」(“esteemed”, 356) を払え、「信望」(“respect”, 356) を抱けないと結婚生活は不幸になることを必死に説こうとする場面が登場する。ベネット氏は自らの結婚の失敗に懲り、お互いに敬意を払い合うことのできない夫婦の不幸を娘エリザベスにだけは繰り返させたくないと、ダーシーとの結婚を思い止まらせようとしているのである。エリザベスは幸せな結婚生活には敬意を払い合える対等な関係が必要不可欠であることを、両親の結婚生活を観察することによって、そして当事者の口から伝えられ、思い知らされるのだ。

エリザベスがダーシーの最初の求婚を断った理由の一つとして、両親の不幸な結婚生活が幸せな結婚生活には不可欠だと彼女に日々示してくれている、この伴侶となる相手に抱く必要のある敬意を、ダーシーがまったくもってエリザベスに払ってくれる様子がなかったという点が挙げられる。エリザベスの「ウィットと快活さ」(“wit and vivacity”<sup>8)</sup>, 86, 104) に性的魅力を感じている一方で、彼女に対して十分な敬意を抱いているようには見えないダーシーを、彼の最初の求婚の段階で生涯の伴侶として選ぶということは、当時のエリザベスにとって、自分の両親の結婚生活と同じ道を辿るということを意味してしまっていたに違いない。

叔父ガーディナー夫妻のみでなく、姉ジェインとビングリーの結婚はこの点において理想である。おそらく後先考えず駆け落ちした妹リディアと共通した激しさを持っているエリザベスは、自分への愛のためならば総てを投げ打ってもいいという覚悟の情熱的な愛を心のどこかで求めており、周囲に諷められて諦めてしまえる程度の温かな愛情では満足できず、ジェインやビングリーの愛し方には必ずしも共感してないが、価値観が似ていて、お互いに敬意を払っているという点で、ジェインとビングリーの結婚はエリザベスが最終的に折り合いをつけた結婚の形と同型なのである<sup>9)</sup>。

### 3. 理想の結婚——エリザベスの夫選び

#### 3.1 理想の結婚の条件——経済力

ベネット夫妻を始めとして、シャーロットとコリンズ氏、リディアとウィッカムなど、周囲の様々なカップルの結び付きを観察し、エリザベスは情熱、経済力、敬意を払い合える対等な関係、という三つの条件を併せ持った男性をパートナーとすることこそ理想の結婚であると思ひ至り、総ての条件を兼ね備えた男性の登場を待ち望むようになる。ダーシーに二つ目の条件、経済力があることは誰の目にも明らかである。一つ目の条件、情熱をダーシーがエリザベスに感じていることは、読者には早い時期から一目瞭然になっていたものの、出会い方のまずさもあり、突然の求婚をされるまで、エリザベス本人はその可能性にすら気付いたこともなかった。そして当初ダーシーがエリザベスを敬意を払い合える対等な関係を結ぶ相手と見なしていなかったことは否定できない事実であり、三つの条件を兼ね備えているというエリザベスの理想には程遠かったダーシーは、当然初回の求婚を拒まれてしまうのだ。では、どのようにしてダーシーが自分こそエリザベスの掲げる三つの条件を併せ持つ理想のパートナーであることを証明し、またどのようにしてエリザベスがダーシーこそ自分に幸福な結婚生活を保証してくれる理想のパートナーであると認めるに至ったのかを考察してみよう。

エリザベスはガーディナー夫妻とダーシーの地所、ペンバリーを訪問したことで、それまでは伝聞で得た知識でしかなかったダーシーの圧倒的な経済力を目の当たりにする。見事に統制の取れた<sup>パーク</sup>荘園の様子、品があり、趣味の良い<sup>マナー・ハウス</sup>屋敷の様子を自分自身の目で観察し、召使いや周囲の住民の手放しの賞賛を聞かされ、エリザベスはダーシーの中に理想の<sup>ランドオーナー</sup>領主、理想の<sup>マスター</sup>主人、理想の兄、ひいては理想の父親・家父長像を認めないわけにはゆかず、彼に当然払うべき敬意を抱くことになる。この時点でエリザベスは、領主、主人はどうあるべきか、家父長はどうあるべきか、といった点に関して、ダーシーが自分と同じ価値観を持っていることに感銘を受け、(求婚が四月下旬でペンバリー訪問が八月下旬なので)数ヶ月前には毛嫌いしていたはずのダーシーに対して、彼女の側から三つ目の条件、敬意を払い合える対等な関係を築く心の準備が出来上がることになる。

#### 3.2 理想の結婚の条件——敬意を払い合える対等な関係

ダーシーにとっては自分の妻となる女性がエリザベスの掲げる三つの条件を併せ持っている必要はない。彼が相手の女性に経済力を求める必要などないことは今更説明するまでもない。そして、自分の求婚を断るはずがないと高をくくってエリザベスにプロポーズした彼の傲慢な態度はコリンズ氏のそれに瓜二つで、ダーシーは自分の妻となる女性は自分の価値観を受け入れて当然と思っていたことがうかがえる以上、敬意を払い合える対等な関係を相手の女性と築きたいなどは考えていなかったことも明らかである。ダーシーの理想の女性像とは、おそらく、エリザベスの掲げる三つの条件のうちの一つ目、自分が情熱を感じることが出来る女性であればそれで十分だったようだ。そのため、ダーシーはエリザベスの性的魅力にこれ以上抗し切れなくなったとき、エリザベスの気持ちを押し量ることもせず、彼女の視点から見ればあまりに突然で独り善が

りな求婚をすることになるのだが、敬意を払い合える対等な関係を築こうとする様子のないダーシーは、当然エリザベスに拒まれる結果に終わる。

ここで第二巻第十一章のダーシーの求婚（184-89）について考察してみよう。ダーシーは自分より劣った階級のエリザベスと結婚することは理性に反することであり、大いに悩んだが、ついに情熱に負けて彼女に求婚するに至ったということを彼女に向かってとうとうと述べる。告白される側から見れば、愛の告白と呼ぶには程遠い、こうした演説を聞かされたエリザベスは、自分のように身分の高い人間が、彼女のように身分の低い人間に求婚してやるのだから有難く思え、と彼に命令されているように感じたに違いない。相手の気持ちをまったく考慮せず、一方的に告白するダーシーの態度は、エリザベスの目にはコリンズ氏の求婚と寸分違わぬものに映ったことだろう。

ダーシーは第一巻第十二章という早い段階で既に、エリザベスは自分の好意を嬉しいに決まっていると決め込む自惚れを見せていた。

He wisely resolved to be particularly careful that no sign of admiration should *now* escape him, nothing that could elevate her with the hope of influencing his felicity; sensible that if such an idea had been suggested, his behaviour during the last day must have material weight in confirming or crushing it. (59; emphasis Austen's)

また、二回目の求婚に成功した後にも、最初の求婚時に自分が断られるとは思っていなかったと告白している：“I came to you without a doubt of my reception”; “I believed you to be wishing, expecting my addresses” (349)。彼がウィッカムのように自分の男性としてのセクシュアリティに自負を抱いている様子はまったく見られないため、彼の自負の根拠は自らの階級（とそれが生み出す経済力）にあると思われる。女性の結婚生活における幸せとは経済力（のある男性に愛されること）であると信じているからこそ、ダーシーは他の要素を無視して、エリザベスが自分の求婚を喜ばないはずがないと思いつくことができるのである。以前シャーロットが、ダーシーほど身分の高い男性ならば感じて当然だと許容していた（21）、階級意識に根ざした「高慢さ」は、男尊女卑という、エリザベスの気を引くには最悪の様相を呈して彼の求婚に表れてしまうのである。

ダーシーは自分があまりに当然のことを口にしてるので、エリザベスが傷つくなどとは思ってもいない。あるいは、二人の置かれた状況について、当然エリザベスも同じように感じているはずなので、求婚に至るまでの自分の苦悩をこうして包み隠さず話した方が、却って彼女に感謝され、彼女は益々自分が愛されていると感じて喜んでくれると思いついでいるのかもしれない。いずれにせよダーシーは、自分が礼を失っていることにまったく気付いていない。そのために彼女に求婚を断られると、こともあろうに、断った彼女の方が失礼だと感じ、憤りを覚える。二人の階級差が問題であることは明白なので、正直に話して何が悪いのかと聞き直すダーシーだが、確かに彼が主張するように嘘をつく必要はなかったとしても、正直に話すことが相手の気持ちを傷つけることにまったく思いが及ばなかった点は、ダーシーの致命的な欠点である。

ダーシーに欠落した、この他人の気持ちを思いやる態度は、エリザベスが指摘するように、紳

士の必須条件と言える態度である（188）。彼が紳士らしからぬ態度を取ったことを理由に、彼の求婚を断ることを申し訳ないとは思わないとまで言われ、エリザベスに拒絶されたダーシーは、初めて果たして自分の振舞い方が正しかったのかについて深く考えさせられることになる。冷静になったダーシーは、相手の立場に立って物事を考えようと努力する態度が自分に欠如していたことを認められるようになる。男尊女卑というレッテルを貼られても必ずしも不当だと訴えられないそれまでのダーシーの態度を考えれば、エリザベスに振られたことは心外であっただけでなく、憤慨すべき結果であった。それにもかかわらずダーシーがそれまでのいわゆる「高慢な」態度を改めようと決心するに至ったのは、それほどまでにエリザベスに恋していたと言うよりもむしろ、相手の立場に立って物事を考えようと努力する態度が欠如しているという自分の欠点、エリザベスの手厳しい指摘のとおり、自分が紳士として不合格であることを意味してしまっていたからである。あまりに高潔なダーシーはそのことを深く反省し、以後、階級差や性差を人間関係育成の障害にしないことを心がけようと決心したのだ。そのために、次にペンバリーで再会した際、エリザベス（そしてガーディナー夫妻）への彼の態度は豹変することになる<sup>10)</sup>。エリザベスはダーシーの変化を目の当たりにし、彼が三つ目の条件、敬意を払い合える対等な関係の大切さを学んだことを知り、深く感銘を受けることになるのである。

ここで注意しておくべき点がもう一つある。エリザベスが周囲のカップルを観察して自らの結婚観を構築していったように、ダーシーも様々な人間との出会い、特にエリザベスとの出会いを通して自らの結婚観を変容させていったことである。ダーシーは自分がリディアの件で奔走したことをエリザベスに隠したかったのは、彼女に「不安」(“uneasiness”, 346)を与えたくなかったからだとして述べている。エリザベスが感じるであろう「不安」とは、自分（の妹）のために尽くしてくれたことに恩義を感じ、その恩を返すために、自分との結婚を望んでいるダーシーの求婚を受け入れるのが義務なのではないかと悩むことを指す。ダーシーは自分を愛していないのに、ただ恩返しのためだけに自分と結婚してくれるなどという結婚の形を望んではいない。ダーシーはエリザベスが自発的に自分を愛してくれた上で求婚を受け入れてもらうのでない限り納得できない。財力や地位に物を言わせて、相手の女性の意思を無視して、欲しいものを手に入れようとは考えてはいない。最初の求婚時に見せた自惚れと比較すると、ダーシーの結婚観が大きく変化していることがうかがえる。彼もまた、エリザベスと同様に、結婚生活における敬意を払い合える対等な関係の大切さを学んだことは明らかである。

### 3.3 理想の結婚の条件——情熱

ダーシーの改心で読者の目にはエリザベスの掲げる三つの条件が総て揃ったように映るものの、実はエリザベスにはまだ一つ目の条件、情熱が不十分である。リディアの姉だけあって、エリザベスは尋常ではないほど自分に夢中になってくれる男性を求めるロマンチス的な気質があるようで、どんな障害をも乗り越えて来てくれるヒーローを期待しているようだ<sup>11)</sup>。彼女はリディアの駆け落ちによって、これでベネット家の評判も地に落ち、もうダーシーは自分を愛してはくれないだろうと考える一方で（第三巻第四章）、リディアの起こした騒動が一件落ち着いた後でピングリーと共にベネット家を訪ねて来たダーシーが、ペンバリーで見た慇懃な態度を失い、以前のようなよそよそしい態度に戻っていることに理不尽なほど憤ってみせたり（第三巻第十二

章)、もしダーシーがキャサリン令夫人に説得されて自分のことを諦めるようならば、こちらから願ひ下げだなどと強気の発言をしてみせたりする(第三卷第十五章)。

“If, therefore, an excuse for not keeping his promise, should come to his friend within a few days,” she added, “I shall know how to understand it. I shall then give over every expectation, every wish of his constancy. If he is satisfied with only regretting me, when he might have obtained my affections and hand, I shall soon cease to regret him at all.” (341)

彼女は自分のためなら「たとえ火の中水の中」という態度の男性に愛されることに憧れているらしく、だからこそダーシーがウィッカムが自分の義理の弟になるという不名誉を厭わずに、自分の妹のために奔走してくれたことを知ったとき、彼女は彼の自分への底知れぬ愛情を知り、大感激するのである。以前ダーシーは自分の性格を分析する際、自分は根に持つタイプで、一度相手を嫌いになると一生許せないと公言していた(56-57)。となると、ダーシーがかつて妹ジョージアナ(Georgiana)と駆け落ち未遂事件を起こした悪漢ウィッカムを許したとは考えにくい。こうした執念深い生来の本質を抑えてまでも、エリザベスへの愛を貫いた彼の愛情は非常に深く、強いものと考えられる。ダーシーはリディアの駆け落ち事件に際し、自分がエリザベスに対して情熱を抱いていることを、これ以上の形がないほど十分に彼女に証明してみせたのだ。これによって、ダーシーに三つの条件が備わっていることを認め、エリザベスは彼の二度目の求婚を受け入れる決心をすることになるのである<sup>12)</sup>。

## 結び——『高慢と偏見』の新しさと古さ

『高慢と偏見』が執筆されてもう二世紀近くが経とうとしているのに、未だに多くの読者を魅了し続ける原因の一端は、エリザベスとダーシーの理想の結婚に新しさと古さが混在しているところにあるのかもしれない。ダーシーに敬意を払い合える対等な関係の重要性を認めさせたエリザベスは、女性の個性を男性に認めさせたという点で、当時非常に斬新なヒロイン像を読者に呈示していたことだろう<sup>13)</sup>。男性に支配されることを拒否し、当時女性が持つことが憚れた夢、「他者を支配したい」、「他者に影響力を持ちたい」という願望を、ダーシーの愛を確保し、ペンバリーの女主人になることで、結婚という形を逸脱することなく実現化してみせたエリザベスのシンデレラ・ストーリーは、この二世紀の間、同じような夢を抱いてきた多くの女性読者の支持を得続けているとしても何の不思議もない。

しかし、エリザベスはそれほど新しいのだろうか。ダーシーに否定されることに反発するのは、男性に支配されることを拒否しているのではなく、実はダーシー(男性)に高く評価されたいという願望の表れに過ぎないのではないか。偉そうな口答えばかりしておきながら、その実、エリザベスは男性に注目して欲しくて、男性の権力社会の中で認められたいだけなのかもしれない。ダーシーから高く評価されていることを知ると途端に彼に惹かれ始めるエリザベスは、強い男性に守られたいという願望を、父親から異性に移しただけで、家父長制に取り込まれることを好ましく思う彼女は、結局のところ何も新しくはないのだという否定的な読み方もできるはずで

ある<sup>14)</sup>。

エリザベスの新しさと限界と同じ二面性をダーシーにも見出すことができる。女性の個性を男性に認めさせた点でエリザベスが斬新なヒロイン像を呈示したのと同様に、女性の個性を認めたという点でダーシーも斬新なヒーロー像を当時の読者に呈示したことだろう。英国小説の父と呼ばれる十八世紀のサミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) が描いたアンチ・ヒーロー、ラヴレイス (Lovelace) などとは大いに異なり、ダーシーは女性を恋愛ゲームの獲物とは考えておらず、女性を搾取することはしない。また、ダーシーはリチャードソンの描いたヒーロー、サー・チャールズ・グランディソン (Sir Charles Grandison) のように、女性に理想を求めたりはしない。欠点の一つもないとされ、どこか人間性を超越してしまった、天使のような二人のヒロイン、ハリエット・バイロン (Harriet Byron) とクレメンティナ・デラ・ポーレッタ (Clementina della Porretta) に愛し、愛されるサー・チャールズとは大いに異なり、ダーシーは現実の生身の女性を受け入れる。真に新しかったのはエリザベスよりもむしろダーシーであったという解釈も成り立つのである。

しかしやはりエリザベス同様、ダーシーも何も新しくはないという正反対の解釈も成り立つ。エリザベスの反発は実のところ自分に高く評価されたいという願望の表れに過ぎないことを最初から見抜いていて、それを可愛いと感じ、大きく包み込んでいるのだとしたら、ダーシーは結局のところ、父親失格のベネット氏に代わって、エリザベスに対して家父長制における父親の役割を果たしているだけである。偉そうな口答えばかりしていたが、実は人や物を見る目がなく、その判断力は間違いだらけで、口は立つが特別理解力に優れているわけではない、とエリザベスを否定的にとらえた場合、そうしたエリザベスの間違いを直し、正しい方向へと導いていくダーシーの姿に、保守的な価値観を持つ読者は大いに共感するはずである。伝統的家父長制を重んじる読者は、その見事な「じゃじゃ馬馴らし」に爽快感を覚え、ダーシーに旧き良き理想の家父長を見出すことが可能になっているのだ<sup>15)</sup>。

こうした、ヒーロー、ヒロインに混在する新旧の二面性により、『高慢と偏見』は、フェミニズム小説としても、反フェミニズム小説としても、つまり、急進的な価値観を支持する小説としても、保守的な価値観を支持する小説としても、どちらのアプローチからでも楽しむことが許され、どちらの立場を取る読者も満足させることが可能となっている。この作品が今日まで、そして今後も、これほどまでに多くの愛読者を持ち続ける理由は、こうした曖昧性、二重性に拠るところが大きいと考えられるだろう。

## 注

- 1) ペンギン版 (Jane Austen, *Pride and Prejudice* (London: Penguin, 2003)) の第三巻第一章の注の五番 (431) に、このことに関する簡単な解説が付けられているので参照されたい。なお、以下この作品からの引用はこの版の頁数のみを示すこととする。
- 2) エリザベスとリディアの類似は二人の性格描写に同じ形容詞が用いられていることが端的に示唆している。エリザベスの「気質」(“disposition”) は “lively” (14) だと描写され、リディアの「気質」(“feelings”) も “lively” (270) だと描写されている。
- 3) リディアの元気滲刺な様子を描写する際、オースティンは “high animal spirits” (45) という示唆的な表現を使っている。

- 4) ベネット氏の教育放棄に娘たちの引き起こす問題の根源があることは周囲の人々にも明らかとなっている。ウィッカムはベネット氏が介入してこないと考えリディアと駆け落ちをしたのだらうとエリザベスは悔しがっているし (269)、コリンズ氏もリディアの放縦さの責任はベネット氏の甘やかしにあると辛辣な手紙を送ってきている (281)。
- 5) オースティンの時代の階級制度に関しては、ペンギン版の注の413頁から414頁に分かり易い解説が掲載されているので参照されたい。
- 6) 注1参照。これらはのちにエリザベスがダーシーに抱くことになる感情で、特に後者の「感謝の念」(“gratitude”)は当時の女性が抱く愛の基礎となる感情とされていた。
- 7) 十八世紀後半の状況に関してはコウブランド (Copeland 166) を、十九世紀前半の状況に関してはトンプソン (Thompson 198) を参照されたい。
- 8) ちなみにこの「ウィットと快活さ」という表現は『サー・チャールズ・グランディソン』(Sir Charles Grandison, 1752-3)のシャーロット・グランディソン (Charlotte Grandison) の描写に何度も用いられる表現である。二作品の類似性、エリザベスとシャーロットの類似性を指摘する研究者たちの根拠となっている。
- 9) ただしジェインとビングリーの立場はエリザベスとダーシーのそれと反対である。土地持ちのジェントリー階級のベネット氏を父に持つジェインは、商売で成金となった父を持つビングリーより、現在の経済力はいざ知らず、階級面では上である。当時ジェントルマンと見なされた法律家、陸軍軍人、海軍軍人、牧師という職業人が構成する擬似ジェントリー階級 (Smith 73) に属していた弁護士を父に持つベネット夫人でさえ、元来商人であった父を持つビングリーよりも上の階級の出身なのだから、ビングリーの姉ハースト (Hurst) 夫人と妹キャロライン (Caroline) がベネット家を見下す態度には本来根拠はない。それに対して、ダーシーの母親は伯爵家の令嬢であるのだから、ビングリーのジェインに対する態度と、ダーシーのエリザベスに対する当初の態度を同じ尺度で比較すべきではないのも確かである。
- 10) ここで注意しなければならないことは、ダーシーは階級意識や男尊女卑を克服したとまでは言えないことである。彼の変化は、他人の気持ちを思いやる紳士らしい立ち振る舞いを身に付けたことによって生じたものに過ぎないと考えた方がいいだろう。
- 11) 結婚とは財産のない女性が生きていくための手段であると考えるシャーロット (120) は、コリンズ氏との結婚を決めた際、自分は「ロマンチックな」(“romantic”, 123) 気質ではないため、結婚には「居心地の良い家庭」(“comfortable home”, 123) しか求めていないとエリザベスに告げ、彼女を啞然とさせる。エリザベスはシャーロットの決断を責め、彼女を軽蔑 (“sunk in her esteem”, 123) する。実はエリザベスもシャーロットと何ら変わらない状況にあり、目の前に経済的不安、苦境が待ち受けているため、求婚者を選び好みできるような立場にいないことを考慮すると、シャーロットの下した自分とは逆の判断を目の当たりにしたときのエリザベスのこの苛立ちは、彼女がシャーロットが自分はそうでないと宣言した「ロマンチックな」気質の持ち主であることを読者に伝えてくれている。エリザベスは心のどこかで王子様の登場を待ちわびるロマンチストなのである。
- 12) ただし、エリザベスの方がダーシーにどこまで情熱を感じていたのか判断するのは難しい。当初エリザベスは明らかにウィッカムに性愛へと成長していく可能性のある感情を抱いていたが、生涯の伴侶として選んだダーシーと同じような感情を抱いているようには思われぬ。注1で示したように、女性の愛情は自発的なものではなく、自分を愛してくれた男性への感謝の念が愛情に転じると主張されていた時代なので、オースティンは相手に性愛を抱くことの不幸をリディアに体現させた上で、ダーシーへの感謝の念を愛情へと成長させたエリザベスに理想の女性像を体現させてみたのかもしれない。あるいはエリザベスにとっての性愛とは愛することにあるのではなく、愛されることにあるのかもしれない。リディアが多くの軍人たちに囲まれてチャホヤされることを夢見ていたように (224)、彼女の姉であるエリザベスもウィッカムにチャホヤされることを喜んでいる。エリザベ

スの性的高揚は尽くすことではなく、尽くされることで生じる種類のものなのかもしれない。

- 13) エリザベスをそれまでに存在しなかった新しいタイプのヒロインと見なす研究者は例えばジョンソン (Claudia Johnson)、ジョーンズ (Vivien Jones)、ウォルドロン (Mary Waldron) などである。
- 14) エリザベスを伝統的な古いタイプのヒロインと見なす研究者は例えばスチュワート (Maaja Stewart) などである。エリザベス評価の二面性と作品評価の二面性についてはカプラン (Deborah Kaplan) を参照されたい。
- 15) 例えばスチュワートやメラール (Anne Mellor) などはエリザベスのダーシーとの結婚を伝統的家父長制への取り込みととらえている。

## 引用文献

- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. 1813. Ed. Vivien Jones. London: Penguin, 2003.
- Copeland, Edward. *Women Writing about Money: Women's Fiction in England, 1790-1820*. Cambridge: CUP, 1995.
- Johnson, Claudia L. *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. 1988. Chicago: The U of Chicago P, 1990.
- Jones, Vivien. Introduction to Jane Austen's *Pride and Prejudice*. 1996. London: Penguin, 2003. xi-xxxvi.
- Kaplan, Deborah. *Jane Austen among Women*. 1992. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1994.
- Mellor, Anne. "Gothic novel." *An Oxford Companion to the Romantic Age: British Culture 1776-1832*. 1999. Ed. Iain McCalman. Oxford: OUP, 2001. 528-29.
- Richardson, Samuel. *Clarissa or the History of a Young Lady*. 1747-48. Ed. Angus Ross. London: Penguin, 1985.
- . *The History of Sir Charles Grandison*. 1752-53. Ed. Jocelyn Harris. Oxford: OUP, 1986.
- Smith, Johanna M. "I Am a Gentleman's Daughter": A Marxist-Feminist Reading of *Pride and Prejudice*". In *Approaches to Teaching Austen's Pride and Prejudice*. Ed. Marcia McClintock Folsom. New York: MLA, 1993. 67-73.
- Stewart, Maaja A. *Domestic Realities and Imperial Fictions: Jane Austen's Novels in Eighteenth-Century Contexts*. Georgia: The U of Georgia P, 1993.
- Thompson, F. M. L. *The Rise of Respectable Society: A Social History of Victorian Britain, 1830-1900*. London: Fontana Press, 1988.
- Waldron, Mary. *Jane Austen and the Fiction of her Time*. Cambridge: CUP, 1999.